

沈從文の二面性

—郷土小説における庶民女性の服飾叙述描写から見えるもの—

山内智恵美 (大東文化大学外国語学部)

Two contrasting aspects of Shen Congwen betrayed in the way he depicts and describes female commoners' clothing in his countryside novels

Chiemi YAMAUCHI

要旨

在都市小说中，沈从文表现出了对新式女性服饰的双重态度，然而，在乡土小说中，他显示了不同的一面。关于女性城市平民、女性农民的服饰，沈从文虽然作了轻松自然的描写，但实际上没有展示什么特别的关心，只是将其认定为自然的存在。相反，在乌托邦式的罗曼司中，他再次表露出关于理想女性的意象。

关键词：沈从文、湘西系列小说、女性服饰

目次

- 一、はじめに
- 二、庶民社会の服飾への関心の欠如
- 三、余裕に満ちた描写と記述
- 四、ユートピアの風景
- 五、おわりに

一、はじめに

筆者は、既に沈従文小説の服飾描写を分析した論文二本¹を発表した。これらは、いずれも、都市部の上層社会や知識階級に属する女性の服飾を対象としたものであった。本論では角度を変え、沈従文小説における、庶民社会、特に、湘西地方の農村社会に生きる女性の服飾について観察、分析を加えていく。

筆者の基本的な目的は、小説から、中国人の意識の中にある服飾変遷への反応を分析することである。この意味において、沈従文の都市小説は、優れた価値がある。なぜなら、都市社会に関する小説は、服飾の急激な変化に直面した人々の複雑な心情を、読み取ることができるからである。では、湘西シリーズを始め農村に暮らす女性、下層社会に生きる庶民の女性に関する小説は、どうなっているのだろうか。前論で述べた通り、沈従文は都市社会に暮らす女性の服飾について、複雑、且つ相反する態度を示したが、庶民社会の女性の服飾については、どのような態度を示したのだろうか。本論では、これらを把握、分析したい、と考える。

また本論では、湘西シリーズと言われる郷土小説における、服飾描写の技術、技能面についてもふれていく。その理由は、都市小説と郷土小説を比較すると、郷土小説の方が、服飾描写の面では、より優れていると考えるため、服飾描写の技術面についても観察していきたい、と考える。郷土小説の服飾描写については、中国大陸において、若干の先行研究がみられる²。本論の対象が、庶民社会を対象とする小説であるため、タイトルから考えると、彼女たちの研究範囲と重なっているようであるが、本論は、彼女たちの論文と出発点、目標、視点などにおいて、異なる、と認識する。沈従文は優れた小説家であり、湘西シリーズの描写技術が「比較的優れている」と言えるが、筆者は、沈従文をただ単に賞賛したりするための研究を行うつもりはない。作家をただ褒め或いは貶すことは、研究の目的にすべきではない。「優れている」と認識するのであれば、その原因を検証したい、と考える。

¹ 山内 2016 「〈田舎者〉の意外な反発～沈従文小説における都市部女性の服飾叙述描写から見えるもの（上編）～」(『中国言語文化研究第5号』大東文化大学大学院 211-223頁) 山内 2017 「〈真面目者〉の憧憬～沈従文小説における都市部女性の服飾叙述描写から見えるもの（下編）～」(『大東文化大学紀要〈人文科学編〉第55号』大東文化大学 129-142頁)

² 先行研究としては、汪羽施・沈窮竹(2006)「論沈従文小説中湘西少女の服飾描写芸術」(『西南農業大学学报』3期)、沈窮竹(2009a)「論沈従文小説的女性服飾描写」(『長春教育学院学报』2期)、沈窮竹(2009b)「沈従文小説中的湘西土婚服飾描写探微」(『鷄西大学学报』3期)、沈窮竹(2009c)「略論沈従文小説中的女性服飾藝術的審美特徵」(『湖北經濟学院学报』7期)などがあげられる。これらの研究に共通していることは、論文のタイトルには「服飾描写」のことが使われているが、実際の論文では、人物描写を服飾描写の一種と捉えており、研究対象とするものへの明確な線引きが欠けている点である。また彼女たちの論文は、中国大陸における多くの文学研究論文同様、研究対象である沈従文への称賛に紙面をさいている。例えば、沈従文の小説について「清々しく生き生きとした様子が美となる(以清新靈動為美)」「はなやかに艶かしい様子が美となる(以華麗嫵媚為美)」と述べ、彼の小説における服飾描写が美的創造に等しい作業であることを論証しようと試み、「沈従文の偉大な所はここである。(沈従文の偉大之處就在於此)」とひどく感心している。しかしながら、筆者は、このような称賛だけの態度を研究目的にすべきではない、と考える。

二、庶民社会の服飾への関心の欠如

都市社会における服飾の変化について、沈従文はかなり大きな関心を示したため、彼の小説から、当時の都市社会に生きる女性の服飾変化を、直接感じとることができ、更にこの時代の変化と、息吹をも感じとることができた。一方彼は、庶民社会に生きる女性の服飾が、現代化されていくことについては、ほとんど関心をはらっていない。農村社会は、ある種閉ざされた世界であり、都市社会でおきる様々な服飾の変化は、ここでは、完全に「他人事」である。このため彼の小説の中では、湘西などの農村において、服飾が近代化の方向に推移していく過程や変化を、全く感じ取ることができない。沈従文は、農民たちのこのような態度を、ある意味合理化して処理している。つまり、農民が、都市の新時代に生きる人物たちの服飾を受け入れ、理解できないのは当然のことだ、という考え方である。沈従文は農民たちの考えについて、以下のように表現している。

女子学生が、お下げに結うことをしなくなり、適当に髪を縛っていて、まるで鶉の尾のようだ。彼女らの外見が、尼僧の外见到似ているが、完全に似ているわけではない。彼女らの服は、外人の服のようにも見えるが、完全に外人の服になっているわけではない……女子学生という奴は、この辺の田舎では、永遠に奇聞の存在だ。田舎者からみると、彼女らはまるで別世界に生きている人で、その格好といったら奇妙そのもので、行動はもっと変だ……彼女たちが着る服といったら、暑かろうが寒かろうが関係ない（つまり暑い時に厚い服を着て、寒い時薄い服を着る）、お腹が空いていようが、ふくれていようが関係なく、食べ物があれば胃袋にいれる。夜零時を過ぎてからやっと眠り、日中まじめなことを一切しない。歌を歌ったり、球技をしたり、洋書を読んだりして過ごす……彼女らは学校では、男女一緒に授業に出て、親しくなったら、安易に、その男性と夜を過ごす。（結婚の時も）媒人も持参金も要らない、それは「自由（婚姻）」というものだ。（女学生没有辫子，留下个鹌鹑尾巴，象个尼姑，又不完全象。穿的衣服象洋人又不象洋人……女学生这东西，在本乡的确永远是奇闻。从乡下人眼中看来，这些人靠近于另一世界中活下的人，装扮奇奇怪怪，行为更不可思议……她们穿衣服不管天气冷热，吃东西不问饥饱，晚上交到子时才睡觉，白天正经事全不作，只知唱歌打球，读洋书……她们在学校，男女一处上课，人熟了，就随意同那男子睡觉，也不要媒人，也不要财礼，名叫“自由”。—『蕭蕭』1930)³

別の小説の中でも、少女三三は、都市に生きる人々を、奇妙な人たちだ、という態度をとっている。彼女からすれば、都会から来た男性は、農村で農民が絶対着ない、真っ白なズボンと靴を履いて、顔の白いことと言ったら尋常な範囲を超えている。たぶんそれは「芝居を終えた俳優が、顔に

³ 『蕭蕭』1930『沈従文全集』第8巻第253、254頁。筆者訳。この後、特にことわりのないものは、筆者訳とする。

つけた白粉を取るのを忘れたから、だからそんなに白いのだろう⁴と表現し、男性のような短い髪の白い制帽制服の看護師についても、「変な格好」⁵だ、と表現する。その他の小説にも、同じような表現が見受けられる。

ここで、沈從文と魯迅（周樹人）の違いについて考えて見よう。両者ともに、農民は都市の人々を理解できない、と書いている。農民にかぎらず、無知な人々は、自分が理解できないことに遭遇した時、自分の世界や視野が狭くて、知り得ることが少ないからだ、とは言わない。彼らは相手が可怪しい、相手が奇怪なのだ、と言い放ち、時には相手を馬鹿にするのである。魯迅の筆に描かれた阿Qも、沈從文の筆に描かれた農民も、すべて同じである。辮髪を切り落とし、洋式の服装を着る新派の人物錢氏を「ニセ毛唐」或いは「外国のまわしもの」⁶と呼び、敵視したような態度をとる阿Qに対し、魯迅は耐え難い失望と心痛を示し、農民の無知蒙昧と落後が、中国近代社会改革を失敗へと導いた最大原因の一つである、と表現する。しかし、沈從文は違う。沈從文の叙述の中には、冗談めいた雰囲気が残されている。農民の意識が、狭いことから生じた問題であることを指摘していない、とは言えないけれども、彼は都市と農村の差を客観的に表現し、寛容に受け止めており、どちらにも、批判的な態度をとっていない。彼は、農民が、都市の人々を理解できない、時代の歩みに追いつけない、ということは容易に理解できるし、特に悪いことでもない。更に農民たちは、何も強制的に都市文化を追いかける必要もない。農民たちが都市文化を間違っただけで捉えていること、農民たちのこのような誤解そのものも、ある意味で有意義なことである、というのが沈從文の基本的な態度である。

このようなロジックから出発したため、沈從文は農村地区の服飾変化については、基本的に、何の関心も持っていない。ただし、一つ例外がある。それは、『一個婦人的日記』（1927）に書かれた当時の剪髪ブームにおける賛成、反対両意見の記録である。当時湖北を中心に、全国に影響を与えた女子剪髪運動が、突然巻き起こった。大勢の女性が、長い髪を切って、かなり短くした。まるで男性のように。そこで、大妹と呼ばれる若い娘が「私は自分の髪を切ろうと思うの。長い髪は煩わしいたらありゃしない！」だって、「髪が長いのは嫌いだわ。毎日髪を梳かすのに1、2時間もかかるし、寝る時も面倒だもの」。確かに彼女の言うとおりの、髪を切れば楽だが、娘の母親と義理の姉が、反対する。その理由は、「短く切ったら格好がよくないわ」、「髪は美しいものだわ」、「髪は長ければ長いほど格好いいのよ、切ったりしたら惜しいわよ」、「もし切ったりしたら、きっと後悔する」、「髪を切った者は凡俗した尼のように変な格好になるわ」⁷という具合で、彼女は、皆から色々言われるが、小説の叙述者は、彼女がいずれきっと剪髪する、と信じている。例え時代の変化を記

⁴ 『三三』1931『沈從文全集』第9巻第16頁。原文は「唱戏的小生，忘了搽去脸上的粉，所以那么白」。

⁵ 『三三』1931『沈從文全集』第9巻第24、27頁。原文は「穿白袍戴白帽古怪装扮的」「男人一样的短短头发的女人」。

⁶ 『阿Q正伝』1921『魯迅全集』第1巻第496頁、北京、人民文学出版社。原文は「假洋鬼子」「里通外国的人」。

⁷ 『一個婦人的日記』1927『沈從文全集』第2巻第126-127頁。原文は「我想把我头上的这些毛剪了。我真讨厌它！」「我就嫌它长。一天梳，要一点两点钟。睡时也讨厌。」「剪得很短总不大好看。」「头发是很美的东西。」「头发多长多好，剪掉也可惜。」「剪去以后又来悔。」「返俗尼姑的样子。」

した小説の中であっても、沈従文は、中立の立場をとっている。彼は、剪髪する者にも、剪髪を反対する者にも一定の道理があり、誰が正しくて、誰が間違っている、とは言いがたい。剪髪したいのであれば切っても構わない、と語っているかのようである。

ここで再び、魯迅と比べてみようと思う。魯迅の『阿Q正伝』には、男子の剪辮の問題が書かれているし、『頭髮的故事』と『風波』にも、辮髪が中国人にとって、如何に重要かということが書かれている。明らかに魯迅は、剪髪をするかしないかということ、社会が進歩したかどうか、改革が成功したかどうか、国民性を変えることができるかどうかという、大きな問題とみなしている。髪はほんとうに軽いものだが、髪の社会的意義はとても重い、と魯迅は訴えている。一方、沈従文の態度はかなりいいかげんで、剪髪は、何ら重要な問題でもないし、どうあってもよい、剪辮をするかしないかという問題で対立する双方の意見の、どちらも理解することができる、という態度である。つまり、沈従文は農村における服飾変化の社会性についても、かなり鈍感である。

この他にも、上記に列挙した部分を分析してみると、服飾に関連する箇所は、主に議論と対話で形成され、服飾そのものに関する描写が、ほとんどないことがわかる。これは、技術的な問題ではなく、この点から、彼の農村における服飾変化への関心の欠如を感じ取ることができる。彼はまるで、描写するだけの必要性を感じていないかのようである。小説を書く作業というものは、概ね、作者の興味関心が反映されるものであり、作者自身が、描写の対象者に興味関心がある時にこそ、熱心に描写されるものだからである。

三、余裕に満ちた描写と記述

前段落で示したように、沈従文は庶民社会、特に、農村で暮らす女性の服飾変化と、その変化が社会に及ぼす意義については、ほとんど関心を示していないが、彼女たちの伝統的な服飾については、大きな関心を示している。これは、彼の初期小説に書かれた描写から読み解くことができる。

志成の奥さんの今日の装いは、いつもより、更に可愛らしい。洗ったばかりの魚の腹のように白い綿布の上着を着て、青いエプロンを腰に巻いている。まん丸い顔には、化粧用白粉が薄く塗られ、耳には、まばゆい金色の輪っかの耳飾りを垂らしている。細い青絹の布を、眉毛より少し高い位置で頭に巻いていて、衣服が立派だし、白粉の塗り方についても、他のご婦人のように首に白粉を塗るのを忘れ、まるで「加官殻」のようになるような、無様なこともないし、髪もきちんと梳かれている……（志成屋里人今天打扮的似乎更俏皮了。身上那件刚下过水的鱼肚白竹布衫子，罩上一条省青布围腰，圆腾腾的脸庞上稀稀的搽了一点官粉，耳朵下垂着一对金晃晃的圈圈环子，头上那块青绉绢又低低的缠到眉毛以上五分左右额的边，衣衫既撑撑崭崭，粉又不像别的妇人打的忘了顾到脖子，成一个“加官壳”，头又梳得如此索利……—【屠卓边】1925）⁸

⁸ 『屠卓边』1925『沈従文全集』第1巻第301頁。「加官壳」とは、湖南一帯の民間劇に用いられる白いお面のことで

この小説が書かれたのは、1925年のことで、沈從文のごく初期の小説に数えられる。あの時は、まだ、「湘西シリーズ」というような有名な作品も世に出ていなかったし、『辺城』で人気を博する「郷土小説家」でもなかった。だがこの小説には、生き生きとした服飾描写が見られる。このように生き生きとした描写は、彼が成功者となった後に書かれた小説でも、それほど多くは見られない。先の論文でも触れたが、著名な小説『辺城』に登場する翠翠についても、人物描写は、詳細に残されているが、服飾に関する描写は、ほとんど見られない。おそらく生き生きとした描写の有無は、彼自身が持つ故郷の文化への熟知と、その物への思いの深さに原因がある、と考えられる。都市小説の中では、沈從文は、いつも、ある時は憧れをもって、ある時は批判的な態度、といった具合に、ある種特別な感情を抱いて、女性の服飾を叙述描写している。その時の彼は、心のバランスを失っており、落ち着きがなく、イライラして、不穏な雰囲気漂う。一方『屠卓辺』では心のバランスが保たれ、落ち着いている。合理的な態度と、心穏やかで、気分が落ち着いており、良し悪しの評価を加える事なく、彼が深く知り得ている人物、大好きな風景を自然に描いていく。だからこそ、ここでの彼は、余裕がある。沈從文を賞賛しているのではない。彼がとてもリラックスしている、ということを知りたいのである。つまり、人は自分の家にいる時は寛いでおり、社交の場になれば、気持ちを奮い立たせなければならず、そのような所では緊張するものだからである。

この他の小説の中でも、農村女性の生き生きとした外形についての表現、自然な描写から、作者の余裕のある様子を読者は自ずと感じ取ることができる。

これらの表現を見てみよう。

その1、この娘が着ているのは、水色の布製上着で、洗ってから、糊付けしたばかりのように、衣服の角は硬くこわばっている。衣服の上には、プリント模様のエプロンを腰に巻いており、腰が更に細く見える。大きな足(纏足をしていない足)にはいた水色の布靴には、ごく簡単な、いくつかの花が刺繍されている。長い足で歩く様子は、ジャンプしているかのようで、『詩経』の『雅歌』で描写されたカモシカの足がピッタリ合う表現である。後ろに垂らしているのは、太い一本のお下げで、まるで生きている蛇のように、真っ黒で、柔らかくなめらかに揺れ動いている。(这女子，穿的是一件月蓝布衣，新浆洗过的样子，衣角全是硬的。衣上罩了一个印花布围腰，把腰就显得很小了。大的脚，青布鞋子简简单单绣了些花。一副长长的腿子走路象跳跃，正合了雅歌所说的羚羊腿子。拖在身背后的是一根大辫，象一条活蛇，又黑又软滑的摆动。—『闕名故事』1928)⁹

その2、このような若い女性が、昆明附近の農村にはたくさんいる。(彼女たちは)性格が明るく、労作がまめである。真っ黒く赤っぽい顔は(元気そうで)、歯が真っ白で、薄紺色の上着とズボンを着て、腰回りには、小さな銀片をいっぱい縫い付けた花の刺繍をした浅緑色の布製のエプロン、

ある。女性が化粧をした時に、白粉を塗るのが多すぎて、顔が真っ白になるだけでなく、首に白粉を塗るのを忘れてしまい、白いお面をかぶったようになる様を「加官殼」と皮肉って、表現したものである。

⁹ 『闕名故事』1928『沈從文全集』第5巻第371頁。

足元に履いているのは、雲南地方の農村特有の穴模様の刺繍飾りの鞋、つややかなお下げを頭上に巻き上げている。歌が非常に上手なだけでなく、ブランコもとても得意だ。旧正月の一日には友達と一緒に各々の村にでかけブランコをして、馬の革で作った、三丈余りの長さがあるブランコの紐を路の傍の高い木の枝に引っ掛け、十回くらい踏みつけ、ブランコが高く飛んで水平になっても、自由気ままに、(何事もなかったかのように) けろりと平然としている。(这种年轻女人在昆明附近村子中多的是。性情明朗活泼，劳动手脚勤快，生长得一张黑中透红的脸，满口白白的牙齿，穿了身毛蓝布衣裤，腰间围了个钉满小银片扣花葱绿布围裙，脚下穿双云南乡下特有的绣花透孔鞋，油光光辫发盘在头上。不仅唱歌十分在行，大年初一和同伴各个村子里去打秋千，用马皮作成三丈来长的秋千条，悬挂在路旁高树上，蹬个十来下就可平梁，还悠游自在若无其事！—『過節和觀灯』1963)¹⁰

その3、婦人たちが着用しているのは、気分を悪くさせるような赤い布製のズボン、大きな顔、大声で罵り合い、時には上半身裸で、垂れた乳房を露出させ、浜辺で力いっぱい便器をこするのは、鬱憤ばらしにやっているかのようでもあり、更に働きながら、歌を歌っている。(妇女们穿着使人见到极不受用的红布裤子，宽宽的脸，大声的吵骂，有时也有赤着上身，露出下垂的奶子，在浜边用力的刷着马桶，近乎泄气的做事，还一面唱歌度曲。—『腐爛』1934)¹¹

その1に描かれているのは、湖南農村地域の若い女性の外見描写で、内陸地域で良くみかける、纏足をしていない、健康で若い活発な女子が、生き生きと真に迫って描かれている。その2は、雲南地方の農村の様子で、1と同様に、健康で生命力に満ち溢れた、素朴な青年女子が描かれている。その3は、農村の風景ではなく、上海に暮らす貧困市民の様子である。ここには、健康で美しい女子はいないが、彼女たちの余り綺麗と言えない服装から、彼女たちの退屈でつまらない、そして不愉快な心情が、同じ様に、なんとも生き生きと描かれている。

直接的な描写以外にも、沈従文は簡単な叙述を用いて、読者に、湘西地域の農村服飾習慣に触れさせるのである。例えば、「あのおばあちゃんは、浦市の中年女性の装いをまね、常に頭を長い真っ黒なちりめんのスカーフで包んで、眉毛を抜いて、細くしている。」(那老婆照浦市人中年妇女打扮，头上长年裹一块长长的黑色绉绸首帕，把眉毛拔得细细的。—『貴生』1937¹²)などと述べ、時には苗族と思われる服飾の痕跡も描かれている。

あの女の子は、両頬にこってり紅をつけ、あまりサイズが合っていない、新調した着物を着て……先端を新しい油で塗ったばかりの靴を履いていたが、表面に、少し泥がくっついていた。褲子(ズボン)は、紫色がかかった浅緑色の木綿製のものだが……少女は、更に麻花(ねじり揚げお菓子)のような形になっている銀の腕輪をはめていて、それが白い光を放っている。(女孩

¹⁰ 『過節和觀灯』1963『沈従文全集』第12巻第345頁。

¹¹ 『腐爛』1934『沈従文全集』第9巻第197頁。

¹² 『貴生』1937『沈従文全集』第8巻第367頁。

子脸上涂着两饼红色，穿了不甚合身的新衣……脚下穿的是一双尖头新油过的钉鞋，上面沾污了些黄泥。裤子是那种泛紫的葱绿布做的……女孩子手上还戴得有一副麻花纹的银手镯，闪着白白的亮光。—『边城』1934)¹³

(若い娘たちは) 刺繍を学んでいる。エプロンの上には、五色の絹糸を使って、オシドリが蓮池で遊ぶ様子や、カササギが梅の木で囀る様子を刺繍し、布靴の先端には小さい鳳凰を刺繍する。(学刺花扣花，围裙上用五色丝线绣鸳鸯戏荷或喜鹊噪梅，鞋头上挑个小小双凤。—『长河』1938)¹⁴

苗族は銀飾りを好み、刺繍を好み、緑色を好むため、『边城』に登場するこの少女と彼女の母親、更に『长河』に登場する若い娘たちを苗族だ、とする研究者がいるが、筆者は、この見解に懐疑的である。苗族はもちろん紺色や緑色、そして白色を好み、特に、鮮やかな銀飾りや刺繍を好むが、紺色あるいは緑色の衣服着て、銀飾りを身に着け、刺繍のある服飾を身につけている女性が、すべて苗族である、ということの意味するものではない。たぶん、明確な判断をするすべはない、と考える。彼女たちは、苗族であるかもしれないが、苗族の風習の影響を受けた漢族かもしれない。中国における民族融合の程度は、かなり高いため、局部の服装、装飾の特徴を根拠として、彼女たちの民族を判断することは難しい。小説の中で、我々は湘西一帯の苗族の服飾文化の痕跡に出会うが、誰が苗族で、誰が苗族でないということは、我々が分析すべき研究課題ではない。

沈從文の小説の中で、当時の湘西地方を中心とする農村女性の服飾を読み解くことができるが、それらは、系統だったものではない。別の言い方をすれば、それは、沈從文が女性の服飾を、自由に、小説の材料として使っただけのものである。既に上述したことだが、彼は服飾の変化に注意を払うことに、興味を示していない。同様に、彼は、伝統的な服飾の状況を細かく記録しようとしたわけでもないため、読者が読み解けるのは、まとまりのない断片的な一部分でしかない。このような段落は、少なくないわけではないが、筆者は、これ以上一つ一つを取り上げる必要はない、と考える。

四、ユートピアの風景

沈從文は、湘西を理想化し、桃源郷にも似た理想郷を作り上げた。これは学術学界だけではなく、読者たちが抱く共通の見解である。彼はなぜこのように、湘西を熱愛したのであろうか。湘西は彼の故郷であり、彼は故郷を愛し、親近感を持っている。これらは、誰もが考える原因である。この原因以外、彼は、コンプレックスを感じていたのではないだろうか。筆者が既に、前論文において

¹³ 『边城』1934『沈從文全集』第8巻第94、95頁。松枝茂夫訳(1954)『現代中国文学全集』第8巻、『沈從文篇』第41頁、河出書房。松枝氏の訳文を参照し、一部筆者により変更を加えた。

¹⁴ 『长河・人与地』1938『沈從文全集』第10巻第17頁。

分析したように、沈従文は大都会北京に到着してから、心のバランスをくずしている。都市文化に憧れ、都市文化を受け入れたい、と強く望みながら、都市文化に対して抵抗感を懐き、不満を感じ、その上で、都市に暮らす女性の服飾には、鋭い批判をあげている。汚れた都市文化の対比として、彼は純粹で、自然溢れる湘西ユートピアを創りあげた。

当時の湘西は、そもそもそのような理想郷であろうか。そこで生活する人々は、彼が描いたような、幸福を感じていたのであろうか。これらの課題への回答は、歴史学者の仕事である。沈従文は小説家であるため、彼は、自分が好きなものを、自由に表現する権利がある。大量殺戮や頻発する内乱、落伍困窮した農村一帯を、桃源郷と美化するのも彼の自由である。小説が歴史に符合すべきかどうかを、小説家は考える必要もないし、我々もこの点について、批判する権利を持たない。ここで重要視すべきは、彼の素晴らしい湘西世界の中で、女性の服飾は、如何に理想化されたかということだけである。筆者はこれらの美化を、三分類した。第一類は、誰もが行う一般的な美化の方法である。湘西は桃源郷のように、平和で美しい所であり、そこに住む女性も各々が温和で善良、そして優しい。第二類は、少女に関する美化であり、第三類は、妓女の美化である。

始めに第一類について見てみよう。

ゴワゴワ糊のついた紺木綿の着物を着て、花模様を刺繍した白い前掛けをつけた中年の女達が、幾人か集まって、腰をかがめながら、日向で何やら話しながら働いている風景が見られる。一切がつねに、あくまでひっそりと静まり返っており、あらゆる人達が、毎日皆こうした単純な寂寞の中で暮して行く。その静けさが人々に「人事」に対する思索力を増やし、夢をも増やした。(可以见到几个中年妇人，穿了浆洗得极硬的蓝布衣裳，胸前挂有白布扣花围裙，躬着腰在日光下一面说话一面作事。一切总永远那么静寂，所有人民每个日子皆在这种单纯寂寞里过去。一分安静增加了人对于“人事”的思索力，增加了梦。—【边城】1934)¹⁵

農村の定期市のあちこちでは、農家の若い素敵な娘たちにも出会える。皆スタイルが良く色白で、(典型的な中国美人の要素である)麗しい目と小さな口、胸が高く膨らみ、糊付けしたばかりの薄色の手織り木綿を着て、黔中の苗族が、極細の竹を編みこんで作った竹籠を背負い、

¹⁵ 『边城』1934『沈従文全集』第8巻第68頁。松枝茂夫訳(1954)『現代中国文学全集』第8巻、『沈従文篇』第15頁、河出書房。松枝氏の訳文を参照し一部筆者により変更を加えた。

小説以外の随筆にも同じような描写が見られる。「これらの女子は、一目見ただけで如何にも温和で善良、如何にも素朴な四十以下の者たちで、皆が揃って、胸前に紺色の手織り木綿か浅緑色の木綿のエプロンに、花一輪刺繍しているだけでなく、各々が何らかの工夫をこらしている。花の配置が非常に綺麗であり、実在の花なのか抽象的な花なのかは拘らないが、すべて、なんとも調度よい具合に高貴な姿である。霞んだ小雨の中、外からの来訪者が、その目で、この情景を目にすれば、必ずや賛美の中で、軽いため息をつくことであろう。天はいつも、そのような山と水と人を、雨や霞が立ちこめる物寂しさを僅かに感じさせる情景の中にすっぱり包み込み、しかるにこの地方の何処にでも、「生命」を育む輝かしい一面があるのだ。(这些女子一看都那么和善，那么朴素，年纪四十以下的，无一不在胸前土蓝布或葱绿布围裙上绣上一片花，且差不多每个人都是别出心裁，把它处置得十分美观，不拘写实或抽象的花朵，总那么妥贴而雅相。在轻烟细雨里，一个外来人眼见到这种情形，必不免在赞美中轻轻叹息。天时常是那么把山和水和人都笼罩在一种似雨似雾使人微感凄凉的情调里，然而却无处不可以见出“生命”在这个地方有光辉的那一面。』『沅陵的人』1938『沈従文全集』第11巻第354頁。

このあたりの小さな店に並べてあった水白粉と木綿の元結を買い、またあちらの別の小さな店に並べてある小さなはさみとそれ以外の物も買う。(场坪中任何一处, 还可以见到出色的农庄年青姑娘们, 生长得苗条洁白, 秀目小口, 两乳高肿, 穿了新浆洗过的浅色土布衣裳, 背了黔中苗人用极细篾丝织成的竹笼, 从这里小商人摊上, 购买水粉同头绳, 又从那里另一个小摊上, 购取小剪刀同别的東西。

一切切が、まるで新感覚派が描いた感動的な色彩画の世界を見ているようで、無数の小さな点、無数の長い線が一箇所に集まりまとまっているのは、なんとも複雑で、なんともまばゆく、同時に色々の物が集まっているのに、却って調和がとれて揃っているのはなんとも不思議である。(一切一切皆如同一幅新感覚派的动人的彩色图画, 由无数小点儿, 无数长片儿, 聚集综合而成, 是那么复杂, 那么眩目, 同时却又仍然那么和谐一致, 不可思议。—【鳳子】1932)¹⁶

ここでは湘西が、如何に穏やかで、清々しく自然且つ美しいかを強調するために、作者沈從文は叙述描写上で巧みな手法を使うだけでなく、直接的なコメントを用いて褒め称え、読む者に、ここが間違いなくユートピアと同じ楽園である、と信じこませる。そして女性の服飾は、所謂新感覚派が用いる感動的な絵画のように、その一部に組み込まれているのである。

第二類は、農村に暮らす少女達の美化である。美少女が小説の中に登場することは、極めて普通のことである。数多くの小説家が、考えられる限りの、ありとあらゆる手段を用いて、最も美しい美女を作り出す。しかし、沈從文の湘西小説に登場する美女は、すべて少女である。¹⁷ これは、非常に興味深い事実である。この中でも特に有名な美少女は、『辺城』に登場する翠翠である。翠翠については、前文において論述したため、ここで再度述べることはしない。翠翠の他にも、三三、蕭蕭などの美少女が登場する。その中でも最も人の心に響くのは、夭夭である。以下に、夭夭に関する描写を見てみよう。

河畔に、少女二人がやってきた。年下の方は顔が真っ黒で、下顎が尖っており、葱の緑に似た色をした木綿の衣服を身に着け、水色のエプロンを腰に巻いて、エプロンには小さな花が刺繍してあって、指の太さほどの銀のくさりで、背中の後ろで束ね、おさげに編んだ髪を頭上に巻き上げ、背負った目の細かい竹籠には、干し春雨とプリント柄の布を入れている。(河边又来了两个女子。一个年纪较小的, 脸黑黑的, 下巴子尖尖的, 穿了件葱绿布衣, 月蓝布围腰, 围腰上还扣朵小花, 用手指粗银链子约束在背后, 一条辫子盘在头上, 背个小小细篾竹笼, 放了些干粉条同印花布。—【長河】1938)¹⁸

¹⁶ 『鳳子』1932『沈從文全集』第6巻第142頁。

¹⁷ 湘西小説には伝奇神話小説の類も含まれている。これらの小説の中にも、媚金、皇女、皇女の侍女などのたくさんの美女が登場する。筆者がここで指摘している美女とは、現実性のある人物のみを指している。伝奇神話小説における美女については、筆者自身の別の論文で既に取り上げているため、ここで重複して述べることはしない。

¹⁸ 『長河・秋』1938『沈從文全集』第10巻第35頁。

筆者が前論文で既に指摘したように、翠翠は、沈従文の小説に登場する美少女の中でも、最も有名であるが、その実、彼女自身の肖像に対する描写は、ごく簡単に書かれているだけであり、その中でも彼女の服飾に関する描写は、更に簡単である。翠翠と比べて見ると、夭夭に関する描写は、いくぶん細かく緻密である。はっきりと、彼は意識して、必死で、これら美少女の美麗な心動かされる箇所を描写しており、翠翠、夭夭などの美少女は、湘西ユートピアの重要な部分を占めている。彼女たちのいない湘西小説を想像してみれば、沈従文の著名な小説『辺城』『長河』が如何に色あせてみえるかがわかるであろうし、或いは、成立することさえも難いかもしれない。

第三類は、妓女の理想化である。拙論「田舎者の反発」で紹介したように、沈従文は妓女に対して、独特且つ非常によく知られた見解を持っている。即ち妓女とは、世間で言うような不道德なことは何もなく、ある種の職業従事者に過ぎない、という見解である。社会は彼女たちに対して、不公正な偏見を持っているが、実のところは、彼女たちの行為は、純粹且つ自然であり、公開されており、人に、はばかりな所は何もない。彼女たちと比べてみると、都会に住む上層階級の女性は、うわべは高貴で華麗であるが、その心の内は曲折して、ある意味変態であり、その行為も不潔で破廉恥である、と彼は言う。妓女が存在をどのように扱うべきかについてと、妓女制度をどのように捉えるかについては、これは社会学、倫理学の問題であり、服飾研究の課題ではない。筆者が関心を寄せるのは、沈従文と彼以外の小説家たちとの違いである。

妓女の生活を熱心に描いた作家と言えば、誰もが思い出すのは、舒慶春（老舍）であろう。彼は娼妓を不健全な社会の生け贄だと捉え、彼女たちを同情されてしかるべき存在だ、と語る。彼の著名な小説『駱駝祥子』において、主人公車夫が女郎を買う場面が描かれており、庶民の女性が、売春を強いられる様子までも描いている。アヘンを吸い女郎と遊ぶことは、祥子墮落の究極の結末であり、小福子さんの売春は、彼女の人生における破滅の印である。これらの表現から老舍自身が娼妓制度を、女性にとっても、男性にとっても罪悪であり、人生を台無しにしてしまう残忍な制度である、と捉えていることがわかる。彼の『月牙兒』を見てみよう。『月牙兒』は、もっぱら妓女を描いた短編小説である。老舍は深い同情を寄せて、仕方なく妓女にならざるを得なかった月牙兒の悲惨な一生を描いており、強い憤りを持って、彼女を迫害する男性権力社会を譴責する。

比べてみると、沈従文は、もう一方の極限に達していると言える。妓女という生活を選択することは、彼女たちにとって、合理的な理由があるからだ、と認めているだけでなく、妓女という選択も人性（人間性）に適う選択であり、自然なことであり、彼女たちの生活もなかなか良くて、何も特別な苦痛や煩惱があるわけではない、と信じているのである。

筆者は老舍と沈従文の二人について、誰が正しくて誰が間違っている、というような評価を下すつもりはない。ただ沈従文の妓女に対する描写については、深い注意を払う必要がある、と言いたいだけである。

これらの若い婦人たちは、付近の田舎から連れられてきたものか、そうでなければ、四川の兵隊に附いて湖南省に来た後、行き場がなくなった女である。彼女らは縮緬まがいの着物に、

更紗の褲子を穿き、眉は一本の細い線になるまで抜きとって、大きな髻に、むっとするような香りの濃い安油をつける。日中は暇なので、みんな家の前で腰掛けて靴を作り、靴先に紅緑の絹糸で鳳凰を刺繡するか、或いは付き合っている船員の腹巻きに刺繡する。(这种妇人不是从附近乡下弄来，便是随同川军来湘流落后的妇人，穿了假洋绸的衣服，印花标布的裤子，把眉毛扯得成一条细线，大大的发髻上敷了香味极浓俗的油类。白日里无事，就坐在门口做鞋子，在鞋尖上用红绿丝线挑绣双凤，或为情人水手挑绣花抱兜……—【边城】1934)¹⁹

本論の前半第一類において引用したのも『辺城』の一部であり、そこには、主婦と思われる数名がおしゃべりをしながら家事をする、平和でゆったりとした調和のとれた空気が流れていた。比べてみると、先ほど引用した、数名の妓女が、門前で布靴を作る情景と、非常に似通っている。同じように、平和でゆったりとした調和の取れた世界がそこに広がっている。もしも説明を加えなかったとしたら、読者は、彼女たちが家庭の主婦で、家事をしているのだと勘違いしたかもしれない。細かく観察していくと、沈從文が妓女たちの生活を叙述描写する時には、気づきにくい肯定的な暗示を加えている。妓女の生活に対して理想化を行っている、と言ってもいいかもしれない。つまり、人々に、例え妓女であっても、生活の実態は何ら変化が生じるわけでもなく、ごく普通の婦人たちとの違いはいくらもない、という肯定的な暗示である。

その他の同様の表現について見てみよう。

その1、「(妓女を務めている奥さんは)油でテカテカ光っている大きな髻、毛抜きで人工的に抜き取った細い眉、顔に塗った白粉と真赤な胭脂、それからその都会人的しぐさや都会人的服装……彼女はそこでわざと着物を着替える時に、いやに色っぽい紅絹の肌衣をはだけて(夫に)みせた。その肌衣に“鴛鴦戲荷”という模様が刺繡されている。」(大而油光的发髻，用小镊子扯成的细细眉毛，脸上的白粉同绯红胭脂，以及那城市里人神气派头，城市里人的衣裳……在把衣服解换时，露出极风情的红绫胸襟。胸襟上绣了“鸳鸯戏荷”。—【丈夫】1929)²⁰

その2、「船で働く男たちを専門に遊ばせる女郎屋が数軒あって、纏足していない売春婦が数人いて、模様のある藍色の金巾の服に、赤い金巾の褲子をつけ、白粉を顔に、油を髪に塗りたくって、鼻のつけねが指で強く引かれて真赤になった。」(有几家供船上划船人开心的妓院，三五个大脚女人，

¹⁹ 『辺城』1934『沈從文全集』第8巻第70頁。松枝茂夫訳(1954)『現代中國文學全集』第8巻、『沈從文篇』第16頁、河出書房。松枝氏の訳文を参照し一部筆者により変更した。

²⁰ 『丈夫』1929『沈從文全集』第9巻第48、59頁。松枝茂夫訳(1954)『現代中國文學全集』第8巻、『沈從文篇』第102頁、河出書房。松枝氏の訳文を参照し一部筆者により変更を入れた。“鴛鴦戲荷”とは、蓮の花の下に一对の鴛鴦がいる、伝統的な寓意図案の一つである。寓するのは男女の恋愛或いは仲睦まじい夫婦である。この小説の結末は、夫と妓女になった妻と一緒に仲良く田舎に帰って行く。沈從文はずっと、女性が妓女になっても何も悪いことはない、と語りかけるが、結婚して夫がいる女性であってもそうであろうか。本当にそうだとしたら、なぜ妻は多彩で便利な都市での生活を捨てて、田舎にもどるのであるだろうか。妓女になるということは、本当に普通の主婦になると何ら変わらないのであろうか。

穿藍花洋布衣服，紅花洋布褲子，粉臉油頭，鼻梁根扯得通紅。—【建設】1930)²¹

その3、「(妓女二圓は) 流行に倣って髻を大きな餅のような形にし、無造作に首の後ろに垂らし、眉毛は毛抜きで人工的に抜き取って、細長く一本の線のようにあり、短いふっくらした手には、金メッキの指輪を四つはめている。着ているのはいつも、プリント模様の金巾の服で、流行に倣って袖口を広く襟を低くして、襟には、爪楊枝耳かきをぶら下げ、ズボンには、鍵と白銅の穴あき銭をぶら下げている。」(照习气把髻子团成一个大饼，懒懒的贴到后颈窝，眉毛用人工扯得细长成一条线，一双短短的肥手上戴四颗镀金戒子，穿的常是印花洋布衣服，照流行风气大袖口低领，衣襟上长悬挂一串牙签挖耳，裤头上长悬挂一把钥匙和到一串白铜制钱。—【厨子】1932)²²

第一類の表現と比べてみると、ここでの沈從文は、コメントを用いて、妓女の生活や風貌を直接称揚するようなことはしていない。このため一見するだけでは、妓女を美化しているように見えなかもしれないが、全体の表現を見てみると、妓女の描写は彼の湘西小説の一部分であり、彼が作り上げた仮想ユートピアの一部分になっていることがわかる。彼は、湘西がどれほど純潔で、平和且つ調和がとれた世界か、例え妓女であっても、その生活が如何に幸せであるのかを、読者に信じこませようと企んでいる。ここで注意を払わなければならないのは、沈從文の結論は、実は妓女の生活が理にかなっている、としているのではなくて、湘西の妓女の生活が和やかな正常な状態であるとしていることである。『第一次作男人的那个人』『篁君日記』などの都市小説でも、彼は妓女を描いているが、その格調は全く異なる。読者は、彼女たちが、和やかな歳月を送る様子を見ることはない。反して読者が見るのは、彼女たちが、墮落した都市文化の片隅にいる姿である。同じ妓女であっても、湘西にいれば和やかな生活を送りながら、その職責を果たしており、都会にいれば、ありとあらゆる手段を使って男性を誘惑し利益を得ようとする。このどちらになるかを決めるのは、彼女たちが都会に住んでいるのか、田舎に住んでいるのかという点にあることは、明らかである。都会は妓女たちを小悪魔にならしめ、湘西で生活する彼女たちには、全く邪なところがない。妓女を理想化することを通して、沈從文は、湘西の自然と人文的な環境を美化し、同時に、都市の文明の非人間性を指摘するのである。

²¹ 『建設』1930『沈從文全集』第6巻第145頁。松枝茂夫訳(1954)『現代中國文學全集』第8巻『沈從文篇』第291頁、河出書房。松枝氏の訳文を参照し一部筆者により変更。沈從文の『從文自伝・常德』(1934)にもほぼ同じ表現が見られる。「有几家专门供船上划船人开心的妓院，常常可以见到三五个大脚女人，身穿蓝色印花洋布衣服，红花洋布裤子，粉脸油头，鼻梁根扯得通红。」『沈從文全集』第13巻第328頁。

他にも彼の随筆『桃源与沅州』(1935)の中にも、千字を超える文字数を割いて、妓女及び彼女らの生活環境などを詳しく説明している。彼は、このように述べている。「後江」という町に「公妓か私妓かは区別できない数えきれない数の妓女が住んでおり、まじめに自身の職業に従事し……軍人や政治家を慰勞し、沅河流域一帯を往来するアヘンの商売人、木材の商売人、船の所有者及び仕事のため往来する人々を征服した。彼女たちが、それぞれのお客様の財布を空にして、多くの人々の生活を維持し、地方を繁栄させている。」(住下无数公私不分的妓女，很认真经营他们的职业……安慰军政各界，且征服了往还沅水流域的烟贩，木商，船主以及种种因公出差过路人。挖空了每个顾客的钱包，维持许多人生活，促进地方的繁荣。』『沈從文全集』第11巻第234-235頁。

²² 『厨子』1932『沈從文全集』第1巻第301頁。

五、おわりに

ここまでの数本の論文において、筆者は、沈従文の都市小説と郷土小説に描かれた女性の服飾描写を分析観察した。ここに、これらについて少し総括してみる。

都市小説を分析した拙論において述べたように、彼は、都市小説において、憧れにも似た思いを持ちながら反感を抱く、という複雑な態度をとったことを述べた。しかし、郷土小説においての彼は、終始一貫している。湘西は楽園であり、そこに暮らす女性は、平静で、穏やかで、生活の楽しみを享受している。沈従文の自叙伝を読むと、彼が幸せで、楽しい子供時代を過ごしたことがわかる。少なくとも子供の時、彼はたくさんの幸福で且つ、愉快的な記憶を残した、と言える。当人が、子供時代の楽しい思い出を心に抱いている時、子供時代を過ごした故郷に対して、懐かしい感情を抱くものである。都会の文化に適應できず、コンプレックスを持ち続けていた彼が、故郷に対して抱く懐かしい感情から、伝統的な郷土の文化が、現代都市文化に勝っている、という信念へと変化させたのであろう。都市文化への二面的な態度から、我々は時代が変動する時に見せる、人々の複雑な反応読み取ることができたことは、精神的にも意義がある。ここにおいて、都市小説は郷土小説よりおおいに価値がある、と言えるだろう。

しかし小説の描写に限定するのであれば、この判断はまさしく真逆になる。服飾描写については、湘西シリーズの方が優れており、都市小説は些か劣ると言わざるを得ない。ひとまとめにして言うなら、彼の都市小説は、描写が欠如しており、大部分が大雑把な叙述である。高貴なマドンナの箇所を除くと、ほとんど、主人公の女性に関わる服飾描写を目にすることができない。なぜ、このような現象がおこったのであろうか。これは、興味深く、また難解な現象である。筆者は、これが、技術上の問題だとは考えていない。むしろ沈従文が、意識的にまたは、無意識の内に、描写することを放棄したのだ、と考える。一般的に言うなら、女性を書くときは、彼女の風貌、服装、装飾などを書かなければならない。沈従文も湘西小説を書く時には、このようにしている。しかし、都市小説においては、彼はこのような選択を、ほとんど忘れてしまったかのようであり、甚だしい時には、服飾描写することを拒絶しているかのようである。例えば、『一個演員的生活』は、一人の女優を中心に展開された中編小説である。彼は女優に関する多くの事を書いているが、意外にも、服飾に関する描写はない。これは本当に、おかしなことである。彼はよく、服飾描写を放棄している。これは、紛れも無い事実である。しかし、なぜそのようにしたのであろうか。筆者は、いくら考えてもこの謎を解けておらず、その答えを得ていない。文学研究を専門とする碩学から、この事の顛末を、ご教示頂けることを希望するばかりである。これに反し、上述したように、彼の郷土小説の中では、生き生きした服飾描写がたくさん見られる。彼の故郷への懐かしい感情、故郷と結びついた楽しい記憶が、彼が作品を書くときに、彼自身を自然とリラックスさせ、想いのままにペンを走らせるのを助けているかのようである。彼の心には余裕があり、落ち着いていて、生き生きした自然な段落を描き出している。従って、既に文学的価値という点から評価されているように、郷土小説の描写技術は、明らかに都市小説の描写技術より勝っている、という結論を得た。

これまで筆者は、三本の論文を発表し、沈從文小説における女性の服飾描写について、分析を加えた。次の論文では、男性の服飾描写について観察、分析を加えたい、と考える。

参考文献

- 沈從文（2002）『沈從文全集』第1～13巻（小説、散文、伝記巻）、太原、北岳文芸出版社
劉洪濤、楊瑞仁（2006）『沈從文研究資料』天津、天津人民出版社
邵華強（1991）『沈從文研究資料』広州、花城出版社
呉世勇（2006）『沈從文年譜』天津、天津人民出版社
凌宇（1988）『沈從文伝』北京、十月文芸出版社
趙学勇（1990）『沈從文与東西文化』蘭州、蘭州大学出版社
呉立昌（1991）『沈從文—建築人性神廟』上海、復旦大学出版社
韓立群（1994）『沈從文論』天津、天津人民出版社
黄献文（1996）『沈從文創作新論』武漢、華中理工大学出版社
覃新菊（2006）『与自然為鄰：生態批評与沈從文研究』長沙、湖南師範大学出版社
石柏勝（2011）『文化選択与審美判断：沈從文研究總論』長春、吉林大学出版社
小島久代（1997）『沈從文一人と作品』東京、汲古書院
城谷武男・角田篤信（2005）『沈從文「辺城」の校勘』札幌、サッポロ堂書店
城谷武男・角田篤信（2006）『沈從文「蕭蕭」「阿金」「牛」の版本研究』札幌、サッポロ堂書店
城谷武男・角田篤信（2007）『湘西—1996年秋冬写真と文』札幌、サッポロ堂書店
城谷武男・角田篤信（2008）『沈從文研究：わたしのばあい』札幌、サッポロ堂書店
城谷武男・角田篤信（2012）『沈從文「辺城」の評釈』札幌、サッポロ堂書店

（2018年9月27日受理）